

東海3県の殺人事件などの被害者遺族らでつくる自助グループ「緒あしす」(名古屋市)が発足15年を迎え、NPO法人化した。最愛の人を亡くした悲しみを乗り越えるために助け合い、再発防止や被害

者保護を訴えてきた会員たち。20日に集会を開き「遺族同士の支え合い」から「社会への発信」へ、活動の幅を広げていく。

(社会部・谷悠己)

犯罪被害遺族 涙を越え

発足15年 名古屋の団体あす集会

「支え合い」から「発信」へ

代表の青木聡子さん(左)は一九九六年、名古屋市中区で写真店を経営していた両親を覚せい剤使用者の男に殺害された。絶望の中、警察関係者に紹介された富山県の自助グループの会合に参加。涙ながらに心境を語り合う遺族らの姿に「私だけじゃない」と安心感を覚え、地元グループの設立を決意した。

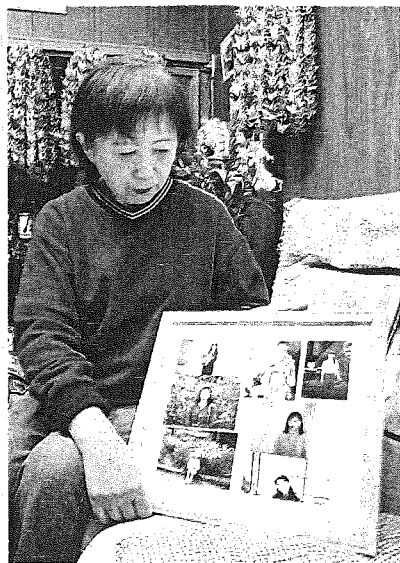
二〇〇〇年九月の設立当初、会合に集まった遺族らは自己紹介するだけで泣き崩れていたが、苦しい胸中を打ち明け合うことで支え合ってきた。年一回の公開集会的のちかなでる」や、公共施設でのパネル展示を通じて、社会への発信にも徐々に力を注いできた。

過去十五年で六十人超の遺族が関わってきた。最近の参加者は二十人程度。行政や企業など、当事者以外の協力を得やすいようにNPO化し、今後は、他地域での啓発活動や会員の講師派遣を検討する。青木さんは「被害者の視点に基づき施策の実現のため、認知度を高めていければ」と話している。今年の「いのちかなでる」は二十日午後一時から、愛知県図書館で開く。先進的な犯罪被害者支援条例を定めた兵庫県明石市の泉房穂市長の講演や討論会がある。問い合わせはメール「info@oasis2000.com」へ。

「話して心が楽に」娘失った女性

「緒あしすがなかったら、どうなっていたか」。二〇一三年に愛知県南知多町の山中から遺体で見発見された名古屋市中川区の漫画喫茶店員、加藤麻子さん(当時四二)の母江美子さん(左)はそう話す。

江美子さんの麻子さんの一人娘を見返す加藤江美子さん(左)は愛知県豊田市内の自宅で



漫画喫茶店の元経営者夫妻が死体遺棄罪で起訴され、初公判後に傷害致死容疑で再逮捕された。だが、遺体は約一年、埋められていたために損傷が激しく、死因の特定ができなかったため、検察は同罪での起訴を断念した。

江美子さんは憤りと失望から精神的に不安定となり、酒量が増え、泣き腫らす日々が続いた。当初は心配してくれていた知人たちも次第に掛ける言葉をなくし、事件のことを話せる相手は夫だけになってしまった。「感情がもつれて、いつもげんかになっていた」と振り返る。

そんな折、緒あしすの存在を知って連絡を取ると、代表の青木さんが自宅に駆けつけて話を聞いてくれた。裁判でも会員たちが傍聴し、難しい法律用語の意味を教えてもらうこともできた。会員同士の交流を重ねるうちに「事件のことを知ってほしい」という気持ち芽生え、昨秋に地元で開かれた緒あしすのパネル展示会には、職場の同僚や近所の知人らを招待することができた。「同じ境遇の人たちと話し合えたことで気持ち楽になり、少しずつだけれど、事件直後の自分から変わったような気がする」